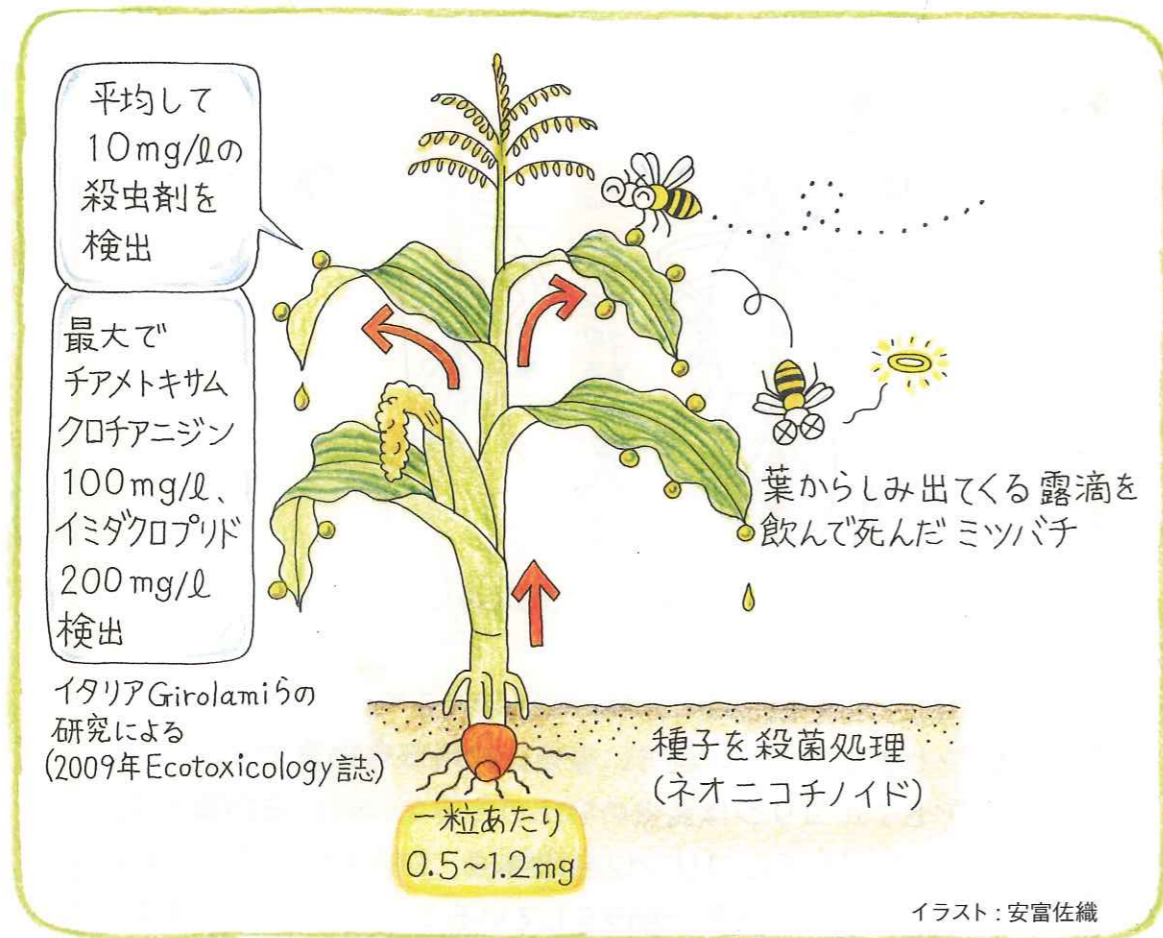


検証！ネオニコチノイドの「安全神話」

農水省・農薬企業・農協などが安全性を強調！



▶神話 (Myth)

- ▷弱毒性 ▷虫は殺すがヒトには安全
- ▷無臭・無色 ▷環境保全型農薬である
- ▷有機リンよりヒトに悪影響が少ない
- ▷少量で効果が長期間持続 ▷揮発しにくい

▶現実 (Reality)

- ▶残効性が高い
- ▶複合毒性が高い (ミツバチの実験では、ネオニコチノイドにある種の殺菌剤を混ぜると毒性は最高1000倍になる)
- ▶代謝産物の毒性が高い (生体の中に入ってから毒性が増加する)
- ▶浸透性殺虫剤である (根から吸い取った薬剤が茎や葉、実などすみずみまで浸透し、洗っても落ちない)
- ▶ヒトにも神経毒性をもつ可能性が高い

●ネオニコチノイドで種子を処理すると、葉の露滴にも高濃度のネオニコチノイドが！

フランス、ドイツなどのヨーロッパ諸国で、農作物の種子をネオニコチノイド処理した結果、ミツバチ大量死が発生しました。ネオニコチノイド処理したトウモロコシの種子が成長した後、その葉からしみ出る水滴を調べたところ、図のようにミツバチの致死量に当たるネオニコチノイドが検出され、ミツバチはその水を飲んで即死した可能性があることがわかりました。

(この検出実験は、3種類のネオニコチノイド、(イミダクロプリド (0.5mg / 1粒)、クロチアニジン (1.25mg / 1粒)、チアメトキサム (1mg / 1粒) をそれぞれ別のコーンに処理して検出実験をしている)

日本でもミツバチ被害が広がっている

★ ネオニコチノイド系農薬などが原因でミツバチが大量死したとみられる県

▲ 農水省調査 (2009) 花粉交配用ミツバチが不足している県 (21 都県)

● 2010.4 農水省研究報告で農薬が関連するミツバチ死滅



●国の抜本対策が早急に必要

日本でもミツバチ被害は広がっています。2005年には岩手県で、700群のミツバチがイネのカメムシ防除のために使用されたネオニコチノイド系農薬(商品名：ダントツ、成分名：クロチアニジン)により大量死し、北海道、長崎県などでもCCDのような被害が報告されています。しかし、今のところ農林水産省は、ミツバチ大量死の原因としてダニやストレス、女王バチ輸入が一時ストップしたことなどをあげて、この農薬の危険性に注目していません。

そして国は2009年、全国的な花粉交配用のミツバチ不足問題への対応として、ミツバチの安定的確保に向けた需給調整という対策を講じました。農作物受粉のためのミツバチが不足している地域に効率的にミツバチを供給するシステム作り

です。

このように新しい農薬への国の対策が遅れる中、全国各地でミツバチ被害だけではなく、スズメなどの野鳥や他の昆虫類などが、次々に姿を消しつつあるといわれています。ますます進む生物多様性の減少に、この農薬が拍車をかけている可能性も考えられます。そして何よりも恐ろしいのは、この農薬についてよく知らない農家の人たちが、濃度の濃いネオニコチノイドをヘリコプターで散布したり、ネオニコチノイド系農薬と有機リン系農薬などを混ぜて使用することがあることです。長崎県などでは、こうした農薬の農業現場での混合使用により、ミツバチだけでなくニワトリや人間の被害も報告されています。ふたたび同様の被害が起きないように、早急に行政による注意喚起がのぞまれます。

